

津田・村岡・和辻の「天皇」論——趣旨説明——

「日本思想史学」という学問領域は、近代日本の学問編制の中で、必ずしも安定した自立的なものではなかった。その理由の第一は、近代日本の学問が、ヨーロッパの学問の成果を翻訳し輸入することであり、その対象がアジア（日本）のような非ヨーロッパ世界に向けられたものであっても、その方法論や主要な概念は、ヨーロッパの学問の中で鍛えられたものを移植するという性格を持っていたからである。日本の思想を研究しようという志向は、そういう近代日本の学問の基本的な性格からして、学問から縁遠いものとして排除されることとなった。理由の第二は、国家としての近代日本の正統性との関わりから生まれる。その正統性は、記紀神話に起源をもつて構成され、アマテラス

の子孫を戴くことで日本国民は一体のものであり続けたという歴史物語を支柱としていたから、日本の思想の本格的な研究は、その正統性に抵触しかねないものとして忌避されてきた。こうして近代日本は、西田哲学のような個別の例外を持ったとはいえ、学問の編制としてみれば、自らの思想的な伝統との対話¹¹対決という課題を長くその外に置いてきたのである。

戦後の日本において、自己分析的・批判的な問題意識に基づく日本思想の研究がなされるようになったのは当然であるが、それは、ヨーロッパの精神史から抽出された問題構成の適用であつたり、世界史の新しい単系発展物語の応用であつたりという反面を伴うものであつた。そこには、

田尻 祐一郎

「日本思想史学」の方法と基礎範疇を日本思想史の内実に即して構築しようという志向は依然として見られず、その意味では、学問としての「日本思想史学」の確立という問題は残されていたべきである。九九年大会が、丸山真男の日本思想史学をテーマにしたシンポジウムを設けたのも、「日本思想史学」の方法と基礎範疇を日本思想史の内実に即して模索する先人としての丸山の課題が、私達自身の課題でもあるという認識に立つてのことだったと思われる。

一方、個別の研究成果は日々発表され、個々の研究者には研究状況の全貌を把握することも望めないが、結果として「日本思想史学」のある意味での市民権は相当に認められるようになってきた。同時に今日、そのような個別研究の蓄積に寄り掛かって「日本思想史学」を安定した自明の領域をなすものと考えらるなら、多くの論者が指摘するように、それはナイーブに過ぎるだろう。本誌二八号（九六年）所載のエッセイ「自明性の解体のなかで」で鹿野政直氏も言われるように、「日本」「思想」「史学」のそれぞれが、近代知批判・国民国家批判という文脈から、その意味や成立根拠を問われているからである。

*

*

このような地点に立って、あらためて未来志向的に「日本思想史学」の在り方を考えようとする時、何から始めればよいのだろうか。その答えは、おそらく誰にも分からないのだろうが、私達は、津田左右吉・村岡典嗣・和辻哲郎のそれぞれの「日本思想史学」に立ち返ることが、そのヒントを与えてくれるのではないかと思う。三人が、いずれも近代日本の学問編製の外側ないし周辺から「日本思想史」を学ぶことで、学問としての「日本思想史学」の方向を指し示した先駆者であることは言うまでもない。しかし、この三人を取り上げるのは、津田なり村岡なり和辻なりに帰れということ言うためではない。この三人の学問的な営為を、それ自身として思想史の対象に置くことで、「日本思想史学」が、どのようなものとして成立し、どのようなものとしてありえた（ありえなかった）のかを、批判的・生産的に検討したいということである。三人については、その個性と業績に応じた多様なアプローチがありうるだろうが、今回のパネルセッションでは、とくに「天皇」論に焦点を定めて論じることとする。三人の「天皇」論は、それぞれの内在的な問題構成の結晶として傑出したものであり、それゆえに、近代日本の正統性の核としての「天皇」像との緊張を孕んだものであった。三人がそれぞれの「天

皇」論に托したものは何だったのか、何を克服しようとしたのか、そしてそれが、近代日本に生きる自己の実存とどのように関わるのか、そして何よりも、それぞれの描く日本思想史の構想の中でどういう意味を付与されているのか、こういう論点について議論が深められればと思っている。

(東海大学教授)